

No. J2209

無形文化の複層的資源化：タイ北部リスの舞踊にみる持続的開発の戦略

東京都立大学 人文科学研究科 博士後期課程

内住 哲生

本研究活動は、タイ北部の少数民族である「リス」の音楽や舞踊を継承するリスの人々を中心に、継承を山地民族 NGO や観光客、政府といったアクターとのかかわりを人類学的調査に明らかにすることを目的とし、新たに以下の内容を明らかにした。

1. 文化振興イベントの個人・特定の家族による開催の傾向

先行研究で報告されてきた大規模な祝祭は、村落単位で行われる新年祭や、IMPECT（山地民教育文化協会）やリス文化連盟などの NGO 主催による文化振興イベントが主であった。しかし 2022 年度の本研究活動により、近年では村落や NGO 以外に、特定の個人やその家族が主催者となってイベントを開催するケースが複数確認された。開催の動機はリスの同朋がリス音楽・舞踊に触れる機会を増やしたい、主催者の政治家への当選を機に大規模な祝祭を上げたいなど多様であった。

2. コミュニティ・ベースド・ツーリズム（CBT）における持続可能性の問題

報告者が過去 2018 年度にも調査を行ったチェンライ県ドーイラーン村で再度調査を実施した。4 年の歳月を経て、同村落の周囲ではコテージの開発が進み、村内にもカフェ兼テントサイトが新設されていた。これらはいずれもリスの建築様式とはかけ離れた西洋式のものである。これに対し、同村落に個人的に外国人を招待しガイドを行っているアレミ氏（女性・仮名）は、そうした形式ではリスの文化が残らないとして、それとは異なる「持続可能な」観光の戦略について語った。彼女は自宅と別に村落の外れに眺望の良い敷地を有し、そこに彼女の父にリスの伝統的な竹製の建築を建ててもらい 10 数人向けの宿泊施設としている。彼女の考えでは、リスの伝統的な生活様式を残すだけでなく、その施設が自然に還る素材でできており、人数を小規模に抑えることでホスト側の負担を軽減できるので、文化的・環境的・社会的に持続可能な観光を行うことができるとのことだった。

総じて、リスの文化振興はこうした個人的な活動がますます重要になってきていることが明らかになった。2023 年度ではここに行政がどのように介在しているのかに注目し、継続して調査を行う。